

Title	複合名詞の意味の広がりに関する研究
Sub Title	
Author	鄧, 夢楠(To, Munan)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2016
Jtitle	日本語と日本語教育 No.44 (2016. 3) ,p.135- 135
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20160300-0135">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20160300-0135</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔大学院文学研究科修士論文〕

## 複合名詞の意味の広がりに関する研究

鄧 夢 楠

本論文では、「古本」、「赤字」のような語自体の意味と、その構成要素となる「古」「本」「赤」「字」のような語基に備わって意味に違いが見られる複合名詞を対象として、語基どうしが結合するときに意味の変化がどのように起こるかを見ようとしたものである。複合名詞の意味の広がりや要因を明らかにすることで、外国人日本語学習者が複合名詞の意味を理解するときに役立つのではないかとすることを目的とした。

本論文は以下のような構成となっている。

第一章では、上述のような研究の目的と意義、日本語教育への応用の必要性を述べる。

第二章は、主に日本語の複合名詞の結合パターンから本論文で対象とする複合名詞の範囲を示し、データの収集方法と分析方法について述べる。

第三章は、先行研究の検討と評価を行い、本論文との関連する点を確認した。

第四章は、本論文で中心的に取り上げた課題の一つとして、色の名前（「赤」、「青」、「白」、「黒」）を前項とする複合名詞を取り上げ、それぞれの言葉の意味と構成要素の関係を分析した。複合名詞には、全体の意味の中に、前項の原義（＝色の名前）のほかに、転義としての「+α」の意味が見られるものがあるが、たとえば、「赤字」（「収入よりも支出の方が多いこと。／また、その数値を示す赤で書いた数字」）のような単語は、「+α」しか見られないタイプであり、「赤紙」（赤い色の紙／旧日本軍の召集令状の俗称／差し押さえの封印証書の俗称）のように、構成要素に原義が残っていて、さらに「+α」の意味が加わって単語全体の意味が多義的になるタイプのものと両方存在することがわかった。一方で、なぜ「赤」「青」「黒」「白」のような色彩語は、色の名前という本来の意味のほかに、周辺の意味が加わりやすいのか、ということが解決できずに課題として残された。

第五章は、本論文のもう一つの課題として、対義的な関係を持つ語基どうしの複合名詞（「古本」「新本」など）を対象にして複合名詞の意味と構成要素となる語基との関係について説明した。その結果、複合語の形成段階で前項の原義には見られなかった「+α」の意味が加わる可能性があると考えられる。例えば、「古」は後ろの構成要素と結合するというプロセスが進行する時点で、周辺の意味として「商品価値のある」といった意味が加わるような例である。「新」の場合は「本」と結合しても「商品価値のある」といった意味は加わらない。対義的な関係を持つ語基であっても、意味的には対称的にならないということであろう。一方で、この種の複合名詞の意味は各辞典の語釈で記述の詳しさに差があるため、意味の観察や分類を行う場合にはあいまいなものが少なくなかったという課題が残された。

第六章は、本論文のまとめを行い、今後の研究課題として、「早起き」、「安売り」（「形容詞＋動詞連用形」）あるいは「秋風」（「名詞＋名詞」）のような本稿で取り上げなかった研究課題が残されていることを述べ、複合名詞の意味の広がりにはさらに明らかにする必要があると述べた。